第3725図

さといも科

おもごてんなんしょう

一名あきてんなんしょう

Arisaema akiense *Nakai*
(＝Arisaema omogoense *Makino*)

関東のヒトツバテンナンショウに匹敵する四国及び中国西部山地の種類。球茎、偽茎、鳥趾状小葉等ほとんど該種と差がない。葉は1個。5月頃に開花するが、仏焔苞は楔状の狭長楕円形、盛開時には前方へ屈み曲ってその先は筒部の開口よりも垂れるに至る。長さ12–22cm、緑色に紫を帯びる。筒部は狭長の偽円筒状で、淡緑色紫彩、口縁は水平、しかしかるく外へ捲れる。肉穂花序の附飾物はやせた柱状で直立し、筒部よりも僅かに長い。和名は最初の発見地愛媛県面河渓に因む。

第3726図

さといも科

あおてんなんしょう

Arisaema tosaense *Makino*

四国及中国地方の山林下に生える多年生草本で高さ20–50cm、四国のものは太って丈低いが葉がはたかり、中国のものは全体が瘠型で丈高い傾向がある。茎は多くは淡緑で紫斑のものは少ない。二葉は開出し、偽茎は比較的短かく、全高の1/3以下、小葉は不整の波状鋸歯を有し、広楕円状卵形。中央のもの最大で10–15cm長、先端は急に鋭尖し、しかも往々尾状に長く伸びる。晩春開花、仏焔苞は淡緑色又は淡汚紫色で舷部は強く前方へ彎曲し、長尾鋭尖頭の卵形。両縁は後へ反り中央部も膨出隆起する。肉穂の附飾物は白色、円い頭の柱状で特に先端が膨れず、筒とほぼ同高。和名は普通緑茎緑苞のものが多いことに因む。

第3727図

さといも科

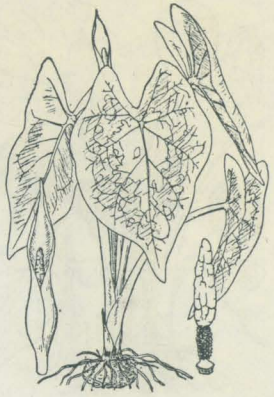
みみがたてんなんしょう

Arisaema limbatum *Nakai et F. Maekawa*

関東地方の浅山の林下にみる多年生草本で、屢々マムシグサと混生するが、その花期が1カ月早く、また、仏焔苞の筒部の口縁に巾広い耳たぶ状の附属物があるので容易に区別できる。高さ25–50cm、球茎は単独、偽茎は汚紫色の蛇紋がある。葉は2個、小葉は7–11、中央最大、長楕円形、鋭尖頭、全縁又は不規則鋸歯縁、仏焔苞の筒部は淡緑に紫采、舷部は倒卵状楕円形で鋭尖、長さ6–10cm、下部は心持せまくなってから急に拡がって水平の両耳片となる。濃紫黒色で立っているものが多い。肉穂の附飾物はやや太い棍棒状で筒よりも1cm内外高い。和名は耳形天南星で両耳片の存在に因む。

第3728図

さといも科



はにしき

一名はいも

Caladium bicolor *Vent.*

南米の熱帯に原産する多年生草本で、カラジュームとして知られ、夏に鉢植としてその美葉を観賞する。地下に塊茎があり、球状をなし、その上部から多数の根を発する。葉は数個皆根生し、長柄を有して直立し、高さ30–50cm許、葉身は先端は下向し、狭卵形、鋭尖頭、箭脚をなし、箭脚をなす耳片は3角状歪卵形、鈍頭、その長さの3分の1は合着して、葉柄と楯着する。葉面は紅、白、紅紫、緑など斑紋を有し、屢々葉縁と葉脈は他部と色を異にする。稀に葉間に長柄を出し、基部を仏焔苞によって包まれた肉穂花序を出す。仏焔苞は緑白色、舟形卵形で中央下で括約して、それ以下は厚質となり、屢々帯紅色を呈する。肉穂は括約部以下には卵形で緑色柱頭を有する雌花或は褐黄色の雄花で密に覆われる。

第3729図

さといも科

ほそばはんげ

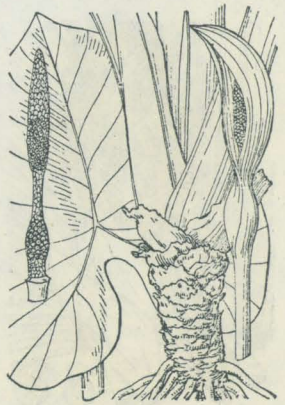
一名しかはんげ

Pinellia ternata *Breit.*
f. angustata *Makino*

カラスビシャクの小葉が極めて細い一品であって、巾5mm–1cmに満たない。時に正常品とまじって見掛ける。元来カラスビシャクは多型であって、葉形は種々であるから、それの細葉化の極端なもので、恐らく突然変異的のものであろう。シカハンゲの名は飯沼慾斎、草木図説草部19巻に載る処で、「紫花半夏」の意味であろうが、これは恐らくリュウキュウハンゲ（Typhonium divaricatum *Bl.*）の別名が誤り載ったものかと著者は考える。

第3730図

さといも科



くわずいも

Alocasia macrorrhiza *Schott*

四国南部の暖地から九州・琉球にかけて常緑林縁の湿度の高い処にはえる多年生草本。巨大な葉をつけ高さ50cm–1mになる。太い根茎は地表に露出して横たわり、時に分岐し、葉痕が輪状につき、頂から3–4枚の葉を立てる。葉柄は太く淡緑色だが、葉身は平潤な広卵状楕円形で、先端尖り、基脚深くえぐれ、楯状に柄がつき、深緑色、光沢があり、裏面は少しく淡色で葉脈が太く隆起する。初夏に黄白色の花序を葉心から出す。仏焔苞は長さ15cm内外で下方1/3のところでくびれ、上方は前屈みに肉穂花序をかこう。下部雌花、中辺不実花、上部雄花。